

映画で知る 語られない3.11

2011年3月11日から2年が過ぎ、様々な意味において「忘れるな」と言われることも多いが、それ以前に知るべきことがあるのではないか。『音のない3.11』は、自らもろう者である今村彩子監督が、災害直後に津波被害にあった宮城の避難所におもむき、被災したろう者取材した作品である。取材中も余震が続き、監督自身も聞こえない人たちが遭遇した地震、津波の恐怖を体験する。『震災とセクシュアリティ、絆』は、ゲイ当事者である島田暁監督が、現在製作中のドキュメンタリーで、昨年製作した『震災から1年被災地いわきからのメッセージ』をひきつぐ作品となる。当たり前のように言われる「絆」という言葉とそのイメージに、傷つき、苦しむ人たちの姿を追っている。今回、2人の監督からメッセージをいただいた。読者の皆様にもぜひ作品をご覧ください。

『音のない3.11』

今村彩子監督



今年の3月11日で大震災2年目になります。私は震災が起きた11日後に宮城を取材しました。2年前の地震直後から毎日のようにテレビや新聞で東北のニュースが流れました。辛い気持ちでテレビや新聞を読んでいる時、疑問が出てきました。東北にも聞こえない人たちがいます。しかし、彼らの情報がほとんどありません。彼らは無事なのだろうか。支援の手は届いているのだろうか。東北のろう者の現状や声を社会に伝えたいと思い、宮城を訪れ、避難所となっている岩沼市総合体育館で信子さん(72歳)に会いました。

岩沼市在住の信子さんは地震が起きた時、近くにあるものにしがみつき、収まるのを待ちました。貴重品をかき集めていたら、近所の人に身振りで、津波が来るから避難するように言われ、夫とすぐ車に乗り、家から離れました。その後、津波が来て家が流されました。もし、近所の人が信子さんに伝えなかったら、信子さん夫婦は津波にのまれ、死んでいたとのこと。私は心臓が縮まる思いでした。信子さんが昭和時代から住んでいた家はなくなっており、地面のコンクリートや木で間取りがかるうじて分かる程度。信子さんは涙を流して、家があった場所を見つめていました。長年暮らしていた家と日常生活が津波で奪われた。その心境はどんなものか……。ごめんね、ごめんねと信子さ

んに謝りながら、私はただカメラを回すしかできませんでした。

津波警報や避難の放送があったことさえ分からず、命を落としたろう者も実際にいる事実を知り、やるせない気持ちになりました。

災害でろう者が一番困ることは、命と安全を守る情報が得られないことです。津波の警報が聞こえない。避難勧告の放送も分からない。避難所に行っても拡声器での声が聞こえず、食料や毛布などの情報がつかめません。そのため、周りを常に見て一緒に動きます。疲れて眠ってしまったら、情報から遮断され、食事や救援物資を得る機会を逃してしまいます。常に周りを見ていなくてはならず、ストレスが溜まり、体調を崩した人もいました。

命に関わる情報に格差があってはならない。映像でこの問題を一人でも多くの人たちに伝えていこうと全国各地で上映・講演をしています。取材で出会った信子さん達が安心して笑顔で暮らせる社会にするために。

